

関係機関長 殿

沖縄県病害虫防除技術センター所長
(公 印 省 略)

病害虫発生予察特殊報について

平成 31 年度病害虫発生予察特殊報第 3 号を発表したので送付します。

平成 31 年度病害虫発生予察特殊報第 3 号

- 1 害 虫 名 : ツマジロクサヨトウ
- 2 学 名 : *Spodoptera frugiperda*
- 3 発 生 地 域 : 沖縄本島
- 4 発 生 作 物 : 飼料用トウモロコシ

5 発生確認の経緯

2019 年 7 月 11 日に沖縄本島北部の飼料用トウモロコシほ場で、ヨトウムシ類幼虫および食害が確認され、ツマジロクサヨトウの疑義があったため、那覇植物防疫事務所に同定依頼した結果、7 月 12 日に県内未発生のツマジロクサヨトウと確認された。

本種の寄主範囲は広いとされているが、現在のところ、県内で被害が認められた作物は飼料用トウモロコシのみである。

本種は、南北アメリカ原産で、2016 年にアフリカ大陸で発生が確認された後、2018 年までにアフリカ中南部のほぼ全域に分布が拡大し、2018 年にはインド、スリランカ、バングラディッシュ等の南アジア、2019 年には中国でも発生が確認された。国内では、本年、7 月 3 日に鹿児島県で初めて本種の発生が確認されている。

6 被害

- (1) 中米・ニカラグアの調査では、本種による肥大期から成熟期のトウモロコシへの加害が 55~100%である場合、収量が 15~73%低下する報告がある。
- (2) 本種は、幼虫が新葉の葉鞘部や若い子実を食害する (図 5)。摂食量が多く、食害部には多量の糞が散在する。

7 形態及び生態

- (1) 形態：成虫は開張約 37mm、雌雄で外観が大きく異なり、オスは前翅先端と中央部に三角形の白斑を持つ (図 1)。終齢幼虫は体長約 40mm で頭部の複眼と前額の境界に淡色の逆 Y 字状模様および尾部の黒色斑点が特徴である (図 2~4)。卵は寄主植物に塊状に産み付けられ、メスの体毛で覆われる。
- (2) 生態：本種は南北アメリカ大陸の熱帯~亜熱帯原産であり、熱帯では年 4~6 世代発生する。幼虫の発育適温は 28℃。南北アメリカでは毎年夏季に成虫が移動・分散するが、暖地を除く地域では越冬できない。
- (3) 寄主植物：本種の寄主範囲は極めて広い。主な寄主植物は以下のとおりである。
アブラナ科 (カブ等)、イネ科 (トウモロコシ、イネ、サトウキビ等)、ウリ科 (キュウリ等)、キク科 (キク等)、ナス科 (トマト、ナス等)、ナデシコ科 (カーネーション)、ヒルガオ科 (サツマイモ等)、マメ科 (ダイズ等) など。

8 防除対策

- (1) 多発すると、被害が拡大する恐れがあることから、ほ場をよく見回り幼虫の早期発見に努める。
- (2) 発生ほ場においては、別紙に指定する薬剤の散布を行う。薬剤散布が困難な場合は、早期刈取りによる青刈りサイレージ処理等を実施する。
- (3) 農薬の使用にあたっては、散布は無風又は風が弱い時に行うなど近隣に影響が少ない天候や時間帯を選び、風向、防除器具のノズルの向き等にも十分注意するとともに、隣接農作物の

栽培者に対して散布予定農薬の種類や散布時期等を事前に連絡するなど、農薬の飛散（ドリフト）に留意する。

(4) 幼虫の分散を防ぐため、収穫後は直ちに耕耘する。

※ 農林水産省によると、本虫は、これまで国内で発生しているヨトウムシ類と同様、的確な防除の実施により被害の軽減が可能であると考えられています。

9 参考文献等

(1) 農林水産省ホームページ、侵入を警戒する病害虫に関するファクトシート、【病害虫の名称：ツマジロクサヨトウ】

(2) 松村、大塚、吉松（2019）ツマジロクサヨトウの中国における分布拡大と日本への侵入警戒. 植物防疫 73 : 434-438



図1 ツマジロクサヨトウ成虫（左：オス；右：メス）植物防疫所 HP より引用



図2 幼虫全体（約3cm）



図3 幼虫（頭部拡大）

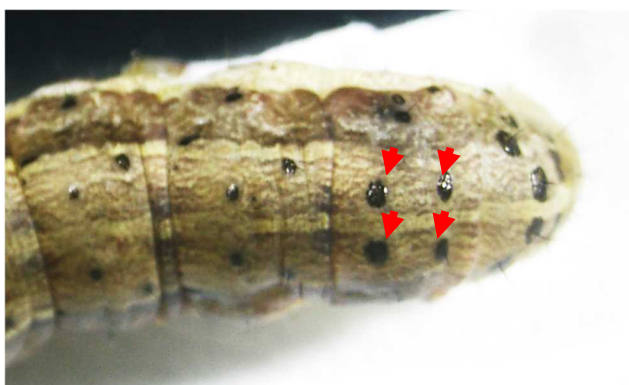


図4 幼虫（尾部拡大）



図5 幼虫および被害飼料用トウモロコシ

★詳しくは沖縄県病害虫防除技術センターにお問い合わせ下さい★

TEL：（本所）098-886-3880、（宮古駐在）0980-73-2634、（八重山駐在）0980-82-4933

ホームページアドレス：<http://www.pref.okinawa.jp/site/norin/byogaichuboj/index.html>

(別紙)

ツマジロクサヨトウに対しては
以下の農薬を使用して防除を行ってください

○飼料用とうもろこし

農薬名	希釈倍率	使用方法	使用時期	散布量	回数
カルタップ水溶剤	1000 倍	散布	収穫 21 日前まで	100~300L/10a	2回以内
アセタミプリド水溶剤	6000 倍	散布	収穫 90 日前まで	100~300L/10a	3回以内
MEP 乳剤	2000 倍	散布	収穫 30 日前まで	100~300L/10a	2回以内

○未成熟とうもろこし

農薬名	希釈倍率	使用方法	使用時期	散布量	回数
エマメクチン安息香酸塩乳剤	1000 ~2000 倍	散布	収穫 3 日前まで	100~300L/10a	2回以内
BT 水和剤	2000 倍	散布	発生初期(但し、収穫前日まで)	100~300L/10a	
フルベンジアミド水和剤	2000 ~4000 倍	散布	収穫前日まで	100~300L/10a	2回以内
シペルメトリン乳剤	1000 倍	散布	収穫7日前まで	100~300L/10a	3回以内

○とうもろこし(子実)

農薬名	希釈倍率	使用方法	使用時期	散布量	回数
エマメクチン安息香酸塩乳剤	1000 ~2000 倍	散布	収穫 30 日前まで	100~300L/10a	2回以内
BT 水和剤	2000 倍	散布	発生初期(但し、収穫前日まで)	100~300L/10a	
フルベンジアミド水和剤	2000 ~4000 倍	散布	収穫前日まで	100~300L/10a	2回以内
シペルメトリン乳剤	1000 倍	散布	収穫7日前まで	100~300L/10a	3回以内

○サトウキビ

農薬名	希釈倍率	使用方法	使用時期	散布量	回数
クロラントラニリプロール・ジノテフラン水和剤	2000 倍	散布	収穫 45 日前まで	100~300L/10a	3回以内
クロラントラニリプロール水和剤	5000 倍	散布	収穫 30 日前まで	100~300L/10a	3回以内
フィプロニル粒剤		植溝処理 土壌混和	植付時	4~6kg/10a	1回
		株元処理 土壌混和	培土時	6kg/10a	1回

○水稻

農薬名	希釈倍率	使用方法	使用時期	散布量	回数
スピネトラム水和剤 (飼料用米に使用する場合を除く)	4000～6000倍	散布	収穫7日前まで	60～150L/10a	3回以内 (播種時又は移植時1回、本田2回以内)
BT 水和剤	2000～4000倍	散布	発生初期(但し、収穫前日まで)	60～150L/10a	
エトフェンプロックス粉剤		散布	収穫7日前まで	3～4kg/10a	3回以内
エトフェンプロックス乳剤	1000倍	散布	収穫14日前まで	60～150L/10a	3回以内

○稲(箱育苗)

農薬名	希釈倍率・量・使用方法	使用時期	回数
クロラントラニリプロール粒剤	育苗箱(30×60×3cm、使用土壌約5L)1箱あたり50g・育苗箱の苗の上から均一に散布する。	は種時覆土前～移植当日	1回
フィプロニル粒剤	育苗箱(30×60×3cm、使用土壌約5L)1箱あたり50g・育苗箱の苗の上から均一に散布する。	は種時覆土前～移植当日	1回
スピノサド粒剤	育苗箱(30×60×3cm、使用土壌約5L)1箱あたり50g・育苗箱の苗の上から均一に散布する。	移植2日前～移植当日	1回

○さつまいも

農薬名	希釈倍率	使用方法	使用時期	散布量	回数
スピネトラム水和剤	2500～5000倍	散布	収穫前日まで	100～300L/10a	2回以内
インドキサカルブ水和剤	2000倍	散布	収穫7日前まで	100～300L/10a	2回以内
エトフェンプロックス乳剤	1000倍	散布	収穫7日前まで	100～300L/10a	3回以内
フルベンジアミド水和剤	2000～6000倍	散布	収穫前日まで	100～300L/10a	2回以内

上記農薬はツマジロクサヨトウに対して登録はありませんが、植物防疫法第29条第1項の規定による防除を行うために使用する農薬として、使用が可能です。

また、上記希釈倍率、使用方法、使用時期、散布量、回数を守ることで、出荷停止等、流通に支障が出ることもありません。

上記の作物以外で使用可能な農薬については、下記までお問い合わせください。

那覇植物防疫事務所

電話 098-868-1679

沖縄県病害虫防除技術センター

電話 098-886-3880